

宮城県気仙沼市立面瀬小学校

学校ビオトープを活用した理科学習の充実

「オモトープ調査隊」がゆく!

成果発表会で奨励賞を獲得

東日本大震災から10年を経た東北地方だが、復興はまだ道半ばだ。宮城県気仙沼市立面瀬小学校も沿岸部の学区では今も槌音が絶えないが、校舎には児童たちの元気な声が響く。そんな面瀬小で話題になっているのが、2019年7月に校庭の南斜面下に作ったビオトープ、通称「オモトープ」だ。

もともと湧水があった場所に窪地を掘って10匹ほどのメダカを放したところ、昆虫や水生生物、鳥類も訪れるようになった。児童たちは身近な生物の宝庫に目を輝かせた。なかでも生き物好きの4年生・畠山景さん、千葉優星さん、稲葉康介さん、千葉柊吾さんの調査と観察は詳細で、2021年2月には中谷財団・科学教育振興助成の成果発表会で奨励賞を獲得した。



成果発表会でオンライン発表を行った「オモトープ調査隊」の4人組



水辺に集まる生物に児童たちも興味津々



崖からの湧水をパイプ(写真左上)で導引している

さらに広がる興味と探究心

担当の鈴木奈保美教諭は「観察は授業内だけで済ませがちですが、『いい気づき』は授業外にあります」と言う。そこで、理科の授業ではチョウの卵をグループごとに配布して羽化までを毎日観察させた。これによって愛着がわいた児童は生物に興味を持つ。その延長線上にオモトープ観察があったのだ。

効果はてきめんだった。前出の4人を中心に、児童たちは発見した生物のスケッチを自主的に廊下に掲示するようになった。また、毎日欠かさずオモトープと湧水の水温を計り続け、年間を通して湧水温度があまり変わらないことなども突き止めた。こうした児童の熱意をくみ取った谷山知宏校長は、12月にオモトープを倍近くに広げる拡張工事を実施。今春の本格稼働を前に、「ミズカマキリが増えているのでその卵を見つきたい」「ヨシノボリやスジエビなど、面瀬川にいる生物を育ててみたい」など、児童の興味と探究心もさらに広がっている。(令和2年度個別助成)



●実施担当
鈴木奈保美 教諭

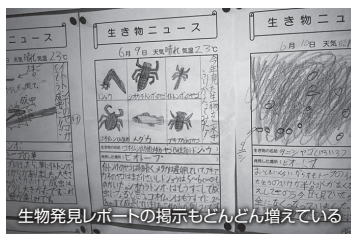
●活動のモットー
「なんでだろう」と感じたことは、児童自身の問題解決能力の育成につながる。そのために、ワクワク感や面白さで興味を持たせることに腐心している。

学校概要



2008年にユネスコスクールに加盟。サステナブル社会の担い手を育てる「ESD(持続可能な開発のための教育)」を推進している。

設立:1984年
生徒数:256人
所在地:気仙沼市松崎下赤田58番地



生物発見レポートの掲示もどんどん増えている

この活動は、中谷医工計測技術振興財団の「科学教育振興助成」により行われています。



公益財団法人

中谷医工計測技術振興財団 〒141-0032 東京都品川区大崎1丁目2番2号 アートヴィレッジ大崎 セントラルタワー8階

シスメックス株式会社創立者の故・中谷太郎氏が私財を投じて設立。医工計測技術分野の発展を願い、「中谷賞」をはじめ各種研究助成、若手研究者支援や国際交流事業を展開。さらに、すそ野拡大のため、科学教育振興活動などに対し、幅広い助成事業を行っています。

中谷財団

検索